

## 資料館での開催の展覧会から 再興九谷・松山窯展

佐々木達夫<sup>1</sup>・在田則子<sup>2</sup>・中村慎一<sup>3</sup>・  
波頭桂<sup>4</sup>・橋爪直子<sup>5</sup>

金沢大学考古学研究室は、再興九谷の松山窯跡を1979・80年に発掘した。その研究成果を地域社会に公開するため、金沢大学考古学研究室、金沢大学資料館および古代学協会の主催による展覧会を資料館で開催した。期間は1997年11月5日から30日。展示に係わった学生は、荒木麻理子、泉亜依子、笛吹正徳、小栗孝明、勝俣竜哉、塩谷佐和子、菅野美香子、中野百合子、西井アカネ、野村昌代、藤川知穂、森由佳、山下篤志の13名の博物館実習生である。主な展示資料は、出土品70点、解説パネル5枚。当時の窯業のあり方を視覚的に示そうと、各種の陶磁器を素焼の資料や窯道具と併せて展示し、また現在も残る窯跡を訪れて撮影した写真を活用するなど工夫がなされた。6日午後にはギャラリートークを開催し、30名を越える入館者に学生が展示解説を行った。会期中、古代学協会の広報活動により、北陸中日新聞と金沢学生新聞に記事が掲載された。

松山窯は再興九谷の一つで、石川県加賀市松山にある。嘉永元年(1848)、大聖寺藩が山本彦左衛門に窯を築かせ、栗生屋源右衛門、松屋菊三郎らを招いて焼いた御用窯で、松山御上窯とも呼ばれ、文久三年(1863)頃民営に移り、明治五年(1872)頃閉窯した。

1979年に明治初期の登窯、素焼用平窯、工房、色絵窯、廃品捨て場、1980年に江戸時代の登窯を発掘し、幕末明治初頭の一貫した九谷焼生産工程のあり方、日常生活用具の種類と変化が判明した。灰釉陶器、染付、褐釉陶器、色絵が出土した。

発掘した遺構は三時期に分かれる。第一期は7室の登窯(第1登窯)で、窯の下方斜面に廃品を捨てる。新しくなる第二期は堆積した廃品捨て場上に平坦面を作り、素焼用平窯を築く。最終段階の第三期は長さ9メートル、幅4メートルの5室の登窯(第2登窯)を以前の窯跡上に築き、素焼窯を廃する。

第三期は、最終捨て場の1層から「□治五一月吉日」銘の色見碗片が出土し、2層から「□治二巳夏日製之」銘の染付燭台が出土した。他に、「大日本九

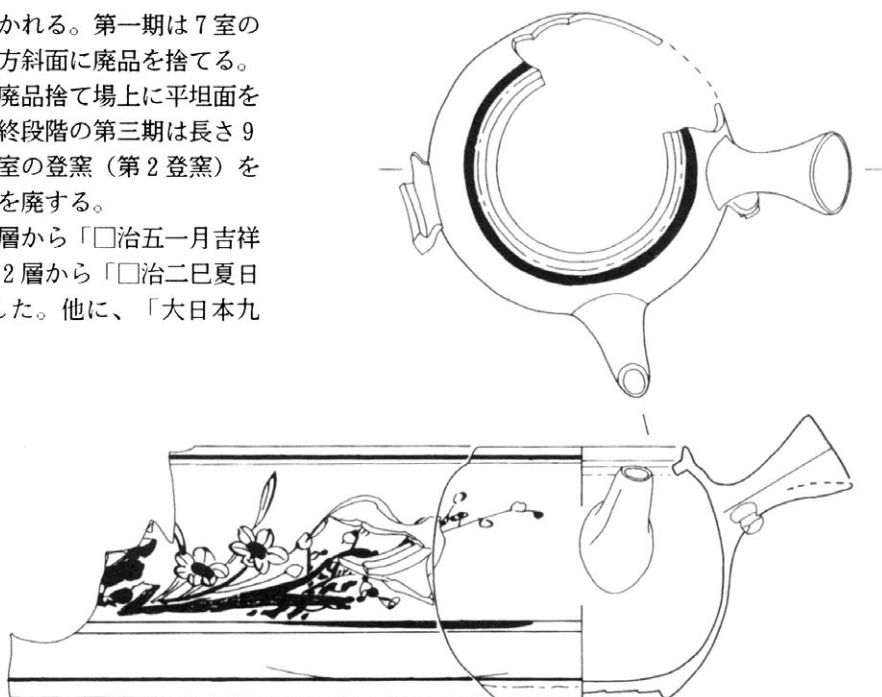
谷」「木下直正」の銘もある。『石川県江沼郡史』に「安政年間山本彦左衛門なるもの之を創始し、明治元年の頃能美郡串村の人木下某之を襲ぐ。・・明治五年に至り、廃絶に帰せり」とあるのに合致する。第二期と第三期は幕末であるが、明確な創始時期を出土品は伝えない。

出土した陶磁器は染付、白磁、黒磁、青磁、鉄絵磁等の磁器と、色絵、灰釉や褐釉の陶器、及び素焼である。窯道具は円筒形サヤとハマが多い。

陶器が多く、碗、皿、鉢、大皿、大鉢、向付、播鉢、片口、德利、杯、台付杯、水注、水指、壺、かめ、土鍋、土瓶、急須、卸し皿、灯明皿、植木鉢等の日常生活用品がある。素地は松山の陶土を用いた灰色素地が主で、磁石を混ぜたものは灰白色になる。釉は灰釉、鉄釉を主とし、青磁釉、青釉、白濁青釉、長石釉、石灰釉がある。

磁器は陶器より少なく、小品が多い。染付が多く、次は白磁である。碗、皿、鉢、杯、急須、壺、德利、香炉、水注、器台等がある。白色と乳白色素地を小型器に用い、松山の陶土を少し混ぜた灰白色素地は量が多い。耐火度は低く、轆轤製が主で、德利や杯は型製もある。染付には山水、草花、人物、動物、鳥等を描き、銘は九谷、九谷製、永楽、九谷永、貴、大日本九谷製、大日本九谷木下直正造等がある。九谷は第一期から用いるが、永楽は第二期だけ、大日本九谷は第三期だけである。色絵の色見片もある。三角錘状の支えを作る「松山」刻銘のある土型も出土した。

<sup>1</sup>文学部教授                      <sup>4</sup>文学部助手  
<sup>2</sup>資料館事務補佐員           <sup>5</sup>資料館事務補佐員  
<sup>3</sup>文学部助教授



松山窯出土 染付急須 R104 器高6.2cm 口径5.2cm 底径4.2cm